

## 人に感謝される仕事をしなさい！

今年も卒業生を送り出した。

大人たちは政治家の選択を誤り、大手企業はコンプライアンスを軽視し、格差拡大のおおりに受けて国民は日々の生活に苦しんでいる。そんな不条理な日本の社会に生徒を送り出さなければならぬことに、ひとりの大人として責任を感じずにはいられない。卒業後も生徒たちと変わらぬ関係を持ち続け、出来る限りの応援支援を続けたい思いである。

そんな折、長文のラインが届いた。今から3年半前、中学3年生の不登校生徒(男子)を抱え進路などに悩んだおられた母親からのラインだ。相談はその時の一度きりだった。中学2年生の3学期から不登校、このままでは8050問題にみられる引きこもりになるのではと思い、何度もわが子に説得などを試みたが母子関係は互いに話ができないほどに悪化していたようだ。年間200件の相談を抱えながら、この相談を覚えていたのは母親の苗字がとても珍しいことからだと思う。

その生徒は、全日制高校を受験するも希望かなわらず不合格、やむなく通信制高校に入学、新たな生活を始めたが週2日の登校もままならず、母親は苛立ちを隠せず登校を執拗に促し疲弊したらしい。しかし、その生徒は1年生から週3日のアルバイトを始め継続していた。それでも母親は、登校しないわが子に愕然とし涙する日々だったという。

そんな母親がわが子の状況を受け入れるようになったのは、私との相談内容をずっと気にしていたからだと思う。「現状を受け入れ、学校のことには触れず、わが子と日常的に普通の話ができるようになれば、子どもは何気なく何かを話すようになるはず。」というアドバイスを思い出し、アルバイトに続けるわが子を認め、普通の会話に心掛けるようにすると、「通信制高校は高校卒業の手段として割り切っている」と初めて高校への想いを語ってくれたようだ。そこまで実に2年を要したと言うラインだった。そして、卒業後の話もできて大学へ合格し、新たな生活へ希望を持っているらしい。もちろん親子に笑顔が戻った。

たった一度の相談を覚えてもらっていたこと、そして丁寧なお礼の言葉をいただいたこと。90歳で他界した私の母親は、私に「人生の最後は人に感謝される仕事をしなさい」言っていた。この話を伝えたら、少しは褒めてくれるだろうか？

(丹羽 豊)